ミャンマー民衆の歴史を、根底から造り変える闘いに、

最大限の敬意を表し、闘いに参加します。！

１０月１８日（退院後１か月）　山本清次

1963 年関西大学法学部入学　65 年革共同中核派加盟　66 年中核派関西地方委員会専従
95 年革共同離脱

１，９月７日、統一政府は、軍打倒への蜂起宣言を、発しました。２月１日、軍事グーデターの大罪に訴えた、軍に対する、ミャンマー民衆の最大、最高の回答です。

軍のクーデターは、軍の自作自演の2008年憲法で、軍の存在を、永久的に護持するという「軍を守る要塞としての憲法」を、確保しているにも拘わらず、2015年選挙で、民衆の圧倒的な支持で、誕生したアウンサンスーチ氏が率いる NLD 政権が、2020年選挙で、再び、圧勝し、引き続き政権を担当することに、深底、恐怖を感じ、銃だけが「頼り」として、踏み切ったものであり、一片の正義も持たない、蛮行であり、それは、40万軍隊で、5000万民衆を制圧し、屈服させ、せん滅するという皆殺し宣言であり、軍の最後の言葉です。

民衆は、直ちに、クーデターへの反撃に立ち上がった。大規模なデモに出れば、軍が、無差別な銃の発砲で殺人に出てくるのが明白（1988，8月学生の決起に対して、2007年仏教徒のサフラン決起）なので、命を守ることを非常に、配慮した闘いを持って、始まった。

今回の軍クーデターとの戦いは、軍との命をかけた闘いであり、軍を打倒、根絶するまで続く闘いであることが、圧倒的な民衆の意志として自覚されています。1988年，8月以来、ミャンマー民衆は、歴史と社会の真の主人公としてものすごく鍛えられ、成長してきたのだ。「民主的政体の確立を求めるというレベルの世界」は、軍を免罪し、ミャンマー民衆の心と闘いを侮辱するものであることを明確に確認することは大事です。この、軍を打倒する、軍を根絶することを、最大な目標とする闘いが開始されたのです。その核心は、「自らの命をかけて」です。人間の命は、一度だけだ。自己の一度だけの命を、自己を全うするために使うのだと」、圧倒的な、膨大な民衆が決意し、立ち上がっているのです。

軍との戦いは、自らも、武装し、防衛し、戦うことだとし、数千、数万の若者が、少数民族の軍隊のもとに、軍事訓練の指導を受けに馳せ参じた。学生を中心として、男女を問わずの、結集だった。「銃を持って、軍と戦う」というこの若者たちの決起は、まず、当の若者たち自身が、全て

を獲得し、真の主人公として登場した。そのことは、決起した医学部の学生の「声明文」が、明らかにしてくれている。そして、少数民族の人々が、この若者たちが、基地＝ジャングルに「軍事訓練を受けに」きたことを、迎え入れ、その真剣さ、本気性に、触れて、軍との戦いを共に担うことを確認し、血盟の、真の連帯が生まれたのです。ミャンマーの歴史は、軍部独裁体制が、少数民族を抑圧、分断、制圧し、多民族国家としてのミャンマーを解体し、何の希望もない国家を永続化してきた。少数民族は、この軍部の抑圧に対して、武装し、生存と自治を求めて、軍部と戦い続けてきました。多数であるビルマ族が、この軍部の圧政に対して、少数民族を守る戦いを作り出せず、共存の闘いを生み出すことが、出来ないで来た歴史だったのが、ついにその歴史に終止符が打たれ、民族の共存、真の連邦制への歴史が始まったのです。軍部打倒、解体の闘いは、ミャンマーの新しい社会を造る革命なのです。
ミャンマー軍隊は、同一国家を構成している、少数民族を殺すことを任務とした＝自国民を、殺すことだけを任務とした、世界の歴史上、類を見ない軍隊です。軍は、自己を「国の父、国の母」であり、「国を領導する責任を負うもの」であるとして、絶対者として、62年以来、存在し、1987年に、国連から「最貧国」と、指定されるまで、停滞と暗黒の社会を作り上げてきた張本人です。
軍は、国家、社会の上に立ち、君臨しているが、その核心は、社会の「寄生虫」なのです。社会が、健康体として、成長していくためには、「寄生虫の退治が不可欠です。寄生虫が居なくなって困るものは、誰もいません。居るとすれば、その人も寄生虫」です。ミャンマーの全民衆が、軍解体の歴史的闘いを始めたことは、実に偉大であり、世界史的意義ある闘いです。
少数民族が、軍と戦ってきた歴史に、1988年以来の、都市部における軍政との戦いが、合流し、遂に、寄生虫退治の闘いとして、民衆蜂起として開始されたのです。
「銃を握って、命をかけて戦う若者を先頭にして、もの凄い重層的な闘いが展開され、遂に、9月7日の「蜂起宣言として、新たな闘いが開始されました。労働者は、公務員の不服従運動として、何十万労働者が職場を放棄しました。
鉄道労働者、病院を始めとした医療労働者、小中学校、高校、大学の先生たちを始めとした、60万公務員の不服従運動は、強烈な衝撃を与え、多くの労働者を鼓舞し、市民たちの心を揺り動かしました。賃金は貰えず、生活に困窮する中でも闘いは、続けられています。すでに、多くの労働者は、処分されています。学校の先生たちは、ジャングルなどで、子供に教えています。医療従事者は、ボランティアとして、市民の間を廻っています。民間労働者もストライキで、たたかっています。人々は、この労働者の生活を支えるために、寄金や、物資を提供して、共に戦っています。軍は、子供たちに、学校に戻るよう親を脅しているが、親たちは、「軍の教育拒否」で、戦っています。新型コロナは、ミャンマーでも、猛威を振るっていて、多くの人々が亡くなっています。軍は、市民への治療は放棄、拒否です。そして、「軍への協力を餌にして、引っ張りこもうとしている」が、市民は、軍に協力するぐらいならば、コロナで倒れる方を選ぶとして、闘っています。2月1日以来、実に感動的な出来ごとが、無数に展開されています。日本では、見れなくなった事態です。
2月1日以来、千数百人が、軍の発砲で殺され、5千以上が、獄に入れられ、数千人が手配され、数万人以上が、解雇され、少数民族の村々が、焼き払われて、何十万という人々が避難を

余儀なくされ、寝る場所もない状態が強制されています。
その中でも闘いが続けられ、遂に「民衆の蜂起宣言」が、発せられました。
クーデターで、民衆の政府は、アウンサンスーチ氏を始めとして、獄に問いこめられ、破壊されたが、生き残った連邦議員が中心となって、新しく政府を立ち上げました。「国家統一政府＝NLD」です。構成員は、全員、軍から、狙われています。公然とは、動けない状態の政府としての、活動です。その中でも、民衆の中心としての役目を果たしています。国際社会では、この「統一政府」こそが、正当な民主的な、政府であるとして、承認することが始まっています。欧米諸国では、すでに承認されています。日本政府は、承認を拒否しています。
９月７日の蜂起宣言以降は、全く、新しい段階にはいっています。統一政府のもとで、少数民族の軍との、共同作戦として、展開されています。４０万軍隊は、人殺しをやり続けてきた集団です。飛行機、ヘリコプター、ドローン、重火器、軍用車、あらゆる軍事装備で、武装し、基地と居住を、確保し、少数民族との戦闘で、戦場でのプロ集団です。４０万軍隊は、巨大な集団です。病院や、学校、寺社を占拠し、道路のポイントを制圧し、携帯、SNS を、遮断し、民衆同士の対話を抹殺し、民衆をバラバラにして、一人、一人をしらみつぶしに、調べ上げ、殺す体制を作り上げています。また、軍は、民衆内部に「軍に協力する人間を、作り上げてきています。
絶望的とも思える事態の中での闘いです。が、少数民族と、民衆は、不屈です。限られた条件の中で、すさまじい戦闘を展開し、軍を追い詰めています。軍が、始めて経験する事態です。軍に協力する人間を、処刑し、展開する軍への攻撃、通信設備の破壊活動等々、軍を基地内に封じ込めています。この間、１千人以上を、制裁し、いくつかの軍事拠点を破壊しています。そして、数百名の兵士、警察官を、民衆側に脱走させています。地域で、軍から、委任されての地域の役員たちからは、任務返上が続出しています。民衆の不動の意志が事態を決しています。軍に、残された道は、民衆皆殺ししかありません。基地内に閉じ込めて、現場に、重装備で、移動し、軍事力で、一つ一つを殺して回るという最も卑劣な手段しか、残っていません。
*届いているニュースは、１０月１５日ですが、「チン州の少数民族の軍事本部の掃討作戦に出る」*です。西部、チン州から、手を付けようとしています。村々を焼き払いながら、人々を追い詰めて、本部をあらゆる兵器で包囲し、一人、一人を殺すという作戦でしょう。そして、これを始めとして、順番に、全ての兵力を一か所に集めて、最後は、統一政府のある拠点を破壊するという計画でしょう。文字通り、民衆皆殺し作戦の発動でしょう。民衆の側は、その現場に合流するのは、困難です。
民衆の側には、自衛し、抵抗する武器はありません。数十万、数百万の民衆が戦える武器はありません。事態は、数百万民衆の、武装自衛決起が求められています。あらゆるところでの、民衆の正義の自衛の闘いが求められるでしょう。その為の、武器はありません。民衆が武装して自己と他人を守ることが求められています。
４０万軍隊を瓦解させる最大の決戦が見詰まってきているのでしょう。民衆の不屈の意志が全てです。この強さが、軍隊を内部から崩壊させるでしょう。そして、全世界が、民衆断固支持、軍の即時解体の声を上げるときでしょう。

2、政府、自民党、公明党、財界は、ミャンマーの軍事クーデターを、支持し、軍部が権力を握り続けることを基本立場、方針で、全面的に日本と日本国民を、民衆殺しの共犯者にしたてあげようとしています。

「最後のフロンティアのミャンマー」として、2013年以来、安倍、麻生を先頭にした、政府と財界は、渡邊日本―ミャンマー協会会長に全権限を与えて、経済協力を展開してきた。ODA を、使った経済協力を、軍部との共同事業として、日本と軍部が、利益を分け合うという体制として、展開されてきた。5000億円の円借款の債務を帳消しにすることで、経済特区を日本だけの出資、展開にすることで、軍部との共同事業体制を築いてきた。軍部は、自らの企業を持ち、株主として、軍部幹部や、軍の部隊とし、利益を軍と軍関係者だけが独占する体制を築いている。企業には、軍隊の軍事行動への分担金を要求している。2017年のロヒンギャの人々への迫害、追放作戦の時には、日本のキリンビールが経営する企業がその分担金を負担しています。このことが、ミャンマー国内で暴露されることで、民衆の不買運動で、大幅の減益となっています。

軍が、クーデターを起こすことで、日本の軍との共同事業の実態が明らかにされました。日本は、国際的に、クーデターへの態度が問われました。外務省が、表向きには、軍非難―民衆支持の立場を表明し、ASEANNとの、共同歩調とすることで、国際的非難―孤立から逃げることに必死にふるまっています。

渡邊は、軍のクーデター発生時には、これは、偶然だったようですが、ミャンマーにいました。滞在中に、渡辺は、軍の最高指導部であり、クーデターの最高指導部のミンアウンフライン国軍司令官と、会談、打ちあわせをし、「クーデター支持、軍擁護」を、確認し、日本に戻って、ミャンマーに進出している大企業を中心とした企業に、「クーデター支持、軍擁護」の態度を確認し、その後も、ミャンマーを訪問し、ミンアウンフライン司令官との会談、打ちあわせを続け、6月30日に、日本―ミャンマー協会の年次総会を開催し、クーデター支持、軍擁護を明確にした年間事業計画を採択した。公然と、クーデターと軍擁護を明らかにしたのは日本だけである。そして、7月のサミットでの蔵相会議に出席した麻生大臣は、各国の蔵相との会談で、「ミャンマー問題は、日本に任してほしい。軍司令官と、話をつけれる渡邊という、特別の人物がいるので」と、いうことを伝えているのです。その上に、9月11日に、ミャンマーに入って、軍がでっち上げた、、政府の農業担当の閣僚と会談し、農業での共同計画を話あっています。完全に軍が民衆を制圧することを前提にした計画を話し合う会談です。渡邊がミンアウンフライ司令と会談したのかどうかは、わかっていません。が日本は、軍部との共同計画での事業を推進することを軍との間で、確認していることです。軍が民衆をつぶし、権力を永久に握ることを支持していることです。

が、政府は、ミャンマー情勢については、沈黙で、事態を隠蔽しょうとしています。岸田首相の所信表明演説で、完全にミャンマーについては、一言も触れてはいません。

これほど、許されないことはありません。ミャンマー情勢は、日々、官邸に届いており、情勢が分

析しておるなかで、「沈黙」は、意図的な情報操作であり、国民を、主権者としては全く、認めていません。核心は、「意図的に情報を隠避する必要があるからであり、軍部との共同事業の継続、軍部支持が日本の態度であることが、世界に明らかになることを恐れてであり、「ミャンマーへの、「最後のフロンティア戦略」が、完全に誤りだったことが、明らかになることを恐れてであること」です。
日本が、「最後のフロンティア」として、ODA を活用しての経済協力戦略は、軍部との共同事業として、推進するという方針を選択したことが、根本的に間違っていたのだ。ミャンマーの寄生虫である軍との共同事業としていることは、日本が、軍と一体となって、民衆の敵として登場したことである。5000万民衆と敵対する関係で、経済協力などは成立するはずがありません。ミャンマーを、軍部が寄生虫として、社会を暗黒と停滞のままにしているのを、寄生虫を退治することで始めて、新しい社会づくりが始まります。その時に、日本が、あらゆる形での、援助と、共同事業の展開が求められています。寄生虫の軍部は、140万人ほどの集団である。この集団に、国家と社会が受け取るべきものが、すべて落ちているということです。日本の2013年以来の、「経済協力の実態」が、この現実です。安倍、麻生を先頭として、これが推進されてきました。だから、沈黙で逃れようとしているのです。
日本には、3万人ほどのミャンマーの人々が、働いて暮らしています。圧倒的に若者たちです。2月クーデター以来、全ての若者たちは、本国の若者の闘いを共有し、日本で、闘いを続けています。働いている若者たちは、非常に厳しい生活を余儀なくされているが、その中から、出せるだけのすべてを本国の人々に送金して、日常の暮らしを極限的に切り詰め、闘いの費用を捻出して、東京での、対政府、外務省との闘いや、日本—ミャンマー協会への抗議、弾劾の闘いを展開しています。「統一政府を正式の政府として承認せよ」「軍への協力になる援助を即時停止しろ」という当然の要求を掲げての闘い、そして、日本のすべてのみなさんに、ミャンマーの民衆の闘いへの支援のお願いを、訴えています。政府、外務省は、無回答で、要求を拒否しています。現在では、完全に日本は、軍部支持で、民衆を踏みにじっていると、認識しています。在日の3万人が、日本政府は、友人ではなく、民衆の敵でしかないと、認識を、明確にしています。日本は、ますます、アジアの人々の力を必要としているなかでの、ミャンマーの若者たちの気持ちが、日本政府は信用できないと、いう心に抱いているという事態は、現在、日本にいる他のアジア諸国の人々にも、同じ気持ちを持たせているのは、間違いありません。スリランカの彼女を日本の国家機関の一つが殺したこと、そして、開き直って、いることと、つながって、日本の国家が恐ろしい国家なのだということが、完全に認識されてしまっているのだ。それでも、良しと言う態度を日本政府がとっているのが、現実です。

3，政府、自民党、公明党、財界の、経済権益の護持の為には、５０００万民衆を、殺すことで、延命を策している軍部を擁護、支持していることは、明白です。何よりもミャンマーの民衆は、現実に確認しています。

日本では、「沈黙で、」事態を隠蔽し、日本をとんでもない方向に持っていくのが、進んでいます。歴史的分岐、歴史的転換点です。

ミャンマー情勢は、民衆と少数民族との歴史的共闘での、「寄生虫退治」として、軍を解体する闘いが、「民衆蜂起」として、開始されたことで、最大の緊張状態に突入しています。2月クーデターが挙行されたことで、アジア、アセアンが、そして、世界が激しく揺さぶられました。その中で、ASEANN は、4月26日に、軍に対して、「軍事行動の即時停止、拘束した人々の釈放、そして、民主的政体への復帰、回復を、要求し、特使の派遣の受け入れ」を、要求してきました。軍は、民衆と少数民族の「蜂起宣言」と、その開始の中で、「軍事的勝利」だけが、全てであるとして、特使派遣を拒否した。これに対して、ASEAN は、10月末の会議に、ミンアウンフライン司令の参加を拒否するという決定を、通告した。軍部には、ASEANN に構っている余裕が全く無くなっている。ASEANN が、どうするかが問われています。「軍を批判し、民衆と少数民族が設立した統一政府を正当な、正式な政府として認めること」が、事態の進展が求める当然の道理なはずですが、おそらく、それは出来ないし、しないでしょう。結局、「内政不干渉という原則」を、口実にして、道理を採択しないでしょう。

この ASEANN の動きに、日本政府は、今回は、全く参加していません。4月以降、8月ごろまでは、ASEANN の「特使派遣を支持する」ことで、あたかも、クーデター批判、軍批判の立場であることのアリバイにしてきていましたが、ここに来て、それすらもやめて、軍擁護の立場を軍に伝えているのです。この8月には、軍が任命、派遣してきた外交官5名を受け入れています。日本政府の立場が明白です。日本を、民衆殺しの共犯者としています。そして、国民が知らずのうちに、共犯者にしているのです。ミャンマーを始めとしたアジア民衆との、共存、交流は破壊されようとしています。今後、ずっと、続く関係です。

*眼を開き、耳を傾け、*ミャンマーの、そして、アジアの人々の声と心をしっかりと確認しましょう。まだ、間に合います。軍を解体する闘いの中で、日本が、軍部と手を切り、統一政府支持を打ち出せば、軍の内部に「大動揺を起こすことは確実です。軍は、1988年には、20万軍隊だったのが、その後、40万軍隊になっています。この新しく増えた20万の部分は、「経済協力の受け入れ後の入隊のはずです。この部分には、日本の軍部批判、統一政府支持を明確にしたら、激しく動揺するだろうし、軍の将来への不安が、一挙に増大するでしょう。それは、巨大な、民衆と少数民族への激励と連帯になるでしょう。

絶対に、この道を日本が歩むべきでしょう。

だが、今の日本の状況では、全く絶望的です。安倍や、麻生を引きずりおろし、誤りを認めさせ、

土下座して、ミャンマーの人々と、日本の国民に謝罪させることなどは、絶望的に不可能に思えます。が、何も声も上げず、行動もしないことは、共犯者になることです。共犯者の罪を犯すのを、自己にも、他人にも許さないというのが、人間の道でしょう。
全く新しい社会を造ることを考えませんか、5000万ミャンマーの人々と、共同で、新しいミャンマーづくりを、そして、それを起点に新しいアジアを創り上げる夢を語ろうではありませんか、
スリランカのウイシュマンさんを殺したことを認めさせることも出来ていないことを恥ずかしく思います。彼女の妹さんと、ともに国と闘っている若い人たちの奮闘に心から敬意を表します。

追記；私事ですが、私は、今年３月３０日に、山で自分の不注意で、怪我をし、防災ヘリとドクターヘリで救出されて、「頸椎損傷」で、９月１８日まで約６か月入院していました。何とか杖を突いて歩けるところまで回復しましたが、手足の回復はまだまだで、字を書けません。なんとか、パソコンやスマホは、一つ指でなんとか、操作できるという状態です。
街頭に立つことも出来ません。まもなく７９になります。貯えもありませんので、役に立つことはできませんが、闘いの戦列に加わることを決めています。